

**超望遠ズームレンズ “RF100-500mm F4.5-7.1 L IS USM” を発売  
焦点距離 100mm から 500mm のズーム全域で高画質を実現**

キヤノンは、「EOS R システム」の核となる交換レンズ「RF レンズ」の新製品として、プロ・ハイアマチュアユーザー向けの超望遠ズームレンズ “RF100-500mm F4.5-7.1 L IS USM” を 2020 年 8 月 27 日に発売します。



RF100-500mm F4.5-7.1 L IS USM

“RF100-500mm F4.5-7.1 L IS USM”は、描写性能や操作性、堅牢（けんろう）性などで最高水準の性能を追求した「L (Luxury)」レンズです。「RF マウント」の特長である大口径・ショートバックフォーカス<sup>※1</sup>を生かした設計により、焦点距離 100mm から 500mm のズーム全域で高画質を実現しています。「RF レンズ」初の超望遠ズームレンズをラインアップに加え、ユーザーの撮影領域の拡大に貢献します。

**■ 焦点距離 100mm から 500mm の超望遠ズームレンズ**

レンズ設計の自由度を高める「RF マウント」の大口径・ショートバックフォーカスにより、「EF100-400mm F4.5-5.6L IS II USM」（2014 年 12 月発売）と比較して焦点距離を 100mm 延長し、広角端 100mm から望遠端 500mm の幅広い焦点距離を 1 本でカバーすることができます。「EOS R システム」のカメラと組み合わせることで、軽量で機動性の高いカメラシステムを構築することが可能です。

**■ ズーム全域で画面中心から周辺部にわたる優れた描写性能**

「スーパーUD レンズ<sup>※2</sup>」1 枚、「UD レンズ<sup>※2</sup>」6 枚を含む 14 群 20 枚の光学設計により、画面中心部から周辺部まで色にじみを抑制し、ズーム全域で高画質を実現しています。また、特殊コーティング「ASC (Air Sphere Coating)」の採用により、フレアやゴーストなどの現象を低減しています。

**■ シャッタースピード換算で 6.0 段の手ブレ補正効果**

「EOS R5」（2020 年 7 月下旬発売予定）装着時は、ボディー内手ブレ補正機構と協調制御することで 6.0 段<sup>※3</sup>の手ブレ補正を実現します。「EOS R」（2018 年 10 月発売）装着時は 5.0 段<sup>※4</sup>の手ブレ補正を実現します。

製品名	希望小売価格	発売日
RF100-500mm F4.5-7.1 L IS USM	オープン価格	2020 年 8 月 27 日

※1 最後部のレンズ面の頂点から撮像面までの光軸上の距離が短いこと。

※2 「UD レンズ」：「UD (Ultra low Dispersion=特殊低分散) ガラス」を用いたレンズ。「スーパーUD レンズ」：UD レンズの性能を大幅に向上させ、UD レンズ 2 枚分、蛍石の特性とほぼ同等の効果を備えたレンズ。

※3 焦点距離 500mm 時。CIPA 規格に準拠。2020 年 9 月上旬公開予定の「EOS R5」ファームウェア適用時。

※4 焦点距離 500mm 時。CIPA 規格に準拠。

※ 赤字部分は 2020 年 8 月 27 日修正。

## <主な特長>

### 1. 焦点距離 100mm から 500mm の超望遠ズームレンズ

- ・「RF レンズ」初の超望遠ズームレンズ。1本で広角端 100mm から望遠端 500mm の幅広い焦点距離をカバーし、ユーザーの撮影領域の拡大に貢献。
- ・「EOS 5D Mark IV」(2016年9月発売)装着時の「EF100-400mm F4.5-5.6L IS II USM」と比較して、「EOS R5」装着時の「RF100-500mm F4.5-7.1 L IS USM」は、焦点距離を 100mm 延長しながら、撮影時質量を約 352g (約 14%) 軽量化。撮影・携帯時の負担を軽減。
- ・「エクステンダー RF2×」(2020年7月下旬発売予定)を装着することで、焦点距離を 600mm ~ 1,000mm<sup>※</sup>相当にすることが可能。

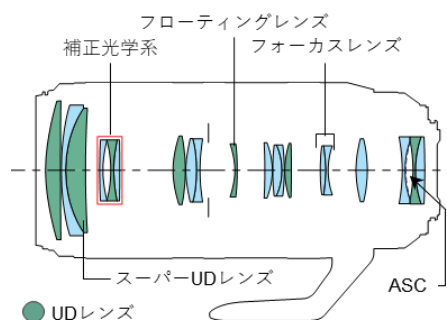
※ エクステンダー使用時のズーム操作の範囲は焦点距離 300mm~500mm。



「EOS 5D Mark IV」を装着した「EF100-400mm F4.5-5.6L IS II USM」(左)と「EOS R5」を装着した「RF100-500mm F4.5-7.1 L IS USM」(右)の全長・質量の比較

### 2. ズーム全域で画面中心から周辺部にわたる優れた描写性能

- ・「スーパーUD レンズ」1枚、「UD レンズ」6枚を含む 14 群 20 枚の光学設計により、画面中心部から周辺部まで色にじみを抑制。画質劣化の原因となる諸収差を低減し、ズーム全域で高画質を実現。
- ・特殊コーティング「ASC (Air Sphere Coating)」の採用により、レンズ面に対して垂直に近い角度で入射する光に対して反射防止効果を発揮。フレアやゴーストなどの現象を低減し、高画質を実現。
- ・フォーカスレンズとフローティングレンズ<sup>※1</sup>の 2 つのレンズ群を、2つの超音波モーター「ナノ USM」で個別に駆動して制御する、電子式フローティングフォーカス制御を採用することにより、近距離撮影時の画質を向上。焦点距離 100mm 域で最短撮影距離 0.9m<sup>※2</sup>を達成するとともに静止画撮影時における高速 AF と動画撮影時における滑らかな AF を実現。



「RF100-500mm F4.5-7.1 L IS USM」(100mm 時)の光学構成図

※1 撮影距離に応じて、レンズを動かすことで収差を補正するレンズ。

※2 焦点距離 500mm 域の最短撮影距離は 1.2m。CIPA 規格に準拠。

### 3. シャッタースピード換算で 6.0 段の手ブレ補正効果

- ・「EOS R5」装着時は、ボディー内手ブレ補正機構との協調制御により、静止画撮影時に 6.0 段の手ブレ補正を実現し、動画撮影時も高い手ブレ補正効果を発揮。
- ・「EOS R」装着時は、静止画撮影時に 5.0 段の手ブレ補正を実現し、動画撮影時も高い手ブレ補正効果を発揮。
- ・被写体の動きに合わせて選択可能な、3つの「IS モード」を搭載。ポートレートや風景など静止している被写体に適した「IS モード 1」、モータースポーツや鉄道写真などで用いる流し撮りに適した「IS モード 2」、スポーツなど不規則な動きの被写体に対して適した「IS モード 3」の 3つを使い分けることが可能。

### 4. 「L レンズ」シリーズに相応しい信頼性と操作性

- ・マウント部、コントロールリング、フォーカスリングに防じん・防滴構造を採用\*。
- ・レンズ最前面に油や水滴が付着しにくいフッ素コーティングを採用。レンズに付着した油分なども溶剤を使わずに乾いた布などで簡単に取り除くことが可能。
- ・太陽光に含まれる赤外線の反射率を高めた遮熱塗料を採用。屋外スポーツなどの炎天下における長時間撮影でも、レンズの温度上昇を抑制。
- ・PL フィルターなどの操作がしやすいスライド式の調整窓付きレンズフードを同梱。

※ 防じん・防滴に配慮した構造になってはいますが、砂じんや水滴などの侵入を完全に防ぐことはできません。

#### <主な製品仕様>

製品仕様の詳細は、ホームページをご参照ください。

#### <ご参考：「L レンズ」の性能を象徴する白い鏡筒>

キヤノンの望遠・超望遠の「L レンズ」は、鏡筒に白色を採用しています。

キヤノンの鏡筒の白色は、国際的なスポーツ大会の報道取材用として開発した 1976 年 6 月発売の大口徑超望遠レンズ「FD600mm F4.5 S.S.C.」、  
「FD800mm F5.6 S.S.C.」で採用したことに始まります\*。

超望遠レンズは、通常のレンズに比べて大きいため日差しの影響を受けやすく、夏の炎天下などの環境下で使用されることも多いレンズです。キヤノンは、熱によるレンズ内部の光学性能の低下を抑制するため、黒よりも熱を反射させやすい白色を鏡筒に採用しました。

国内外のさまざまなスポーツイベントで、フォトグラファーがキヤノンのレンズを並んで構える様子が「白い砲列」と呼ばれて注目を集めるうちに、いつしか「白レンズ」の愛称とともに、鏡筒の白色はプロ向けの高性能レンズを象徴する色としてフォトグラファーの間で定着するようになりました。

※ 一眼レフカメラ専用レンズとして。レンズとしては、1960 年 9 月に発売した野球の中継放送用に開発された放送用カメラ用超望遠レンズ「TV2000mm F11」で採用。



レンズ交換式カメラ用レンズで白色を初採用した  
「FD800mm F5.6 S.S.C.」(1976 年 6 月発売)



スポーツイベントで並ぶ「白い砲列」